

● 朝のこない夜はない ●

感謝かんしゃの心こころで

道みちを開ひらきましよう

山首 鈴木正修



洋 ラ ン

知恩・感恩・報恩

今あるものに感謝を

今、日蓮宗では大荒行が行なわれています。

名古屋からは四人入行しておられます。

荒行は睡眠時間を極限まで削ってお経をあげ

続け、その合間に水行をしたり、写経をしたり

します。食事は朝夕二回、おかゆとみそ汁を一

杯ずつ食べるだけという、本当に命を削るよう

な修行です。

何のためにするかというと、悟りを得るため

です。その悟りの一つが「感謝を知る」ことで

す。ゝありがたいという心をつくるのです。

感謝は、繁栄のもとです。健康のもとでもあ

ります。心から感謝のできる人は物事がうまく

いき、健康にもなれ、家も商売も繁栄するので

す。逆に感謝のできない傲慢な人は、何をやっ

てもうまくいきません。当然病氣にもなりやす

いです。感謝は、人類繁栄の法則と言ってもい

いと思います。

日蓮宗の尼僧さんで瀧本光静さんという方が

おられます。その方が講演で次のような話をし

ておられます。

「ある女性のお話です。その女性は大きな交通

事故にあって右腕を切断するほどの大けがを負

いました。お医者さんは『切らなくてもいいが、

完全に腱が切れているから腕は一生動きません

よ。動かない腕をぶら下げてしていると体に余計な

負担（ふたん）がかかり、頭（あたま）も痛（いた）くなります。それが我慢（がまん）できるならそれでもいいですが、総合（そうごう）的に判断（はんだん）すると切（き）った方（ほう）がいい』と言（い）われました。

若い女性（わかじよせい）ですから切るのはいやです。一生懸（しやうけん）命（めい）左腕（ひだりうで）一本（いっぽん）で生活（せいかつ）できるように訓練（くんれん）しました。

そして、いろいろなことが左腕（ひだりうで）だけでできるようになりました。字（じ）も書（か）けるようになりました。体の（からだ）だるさ（さ）もどうにか我慢（がまん）できます。ところが、外出（がいしゅつ）のとき運動靴（うんどうくつ）を履（は）くにも片手（かたて）では紐（ひも）が結（むす）べないなど、左腕（ひだりうで）一本（いっぽん）では難（むづか）しいことが日常生活（にちじふせい）の中（なか）にいっぱいありました。それでだんだん落ち込み（こ）み、ついには引きこもりのような状態（じふたい）になってしまいました。外（そと）に出（で）るのが嫌（いや）になってしまったのです。しかし彼女（かのじよ）は、本（ほん）を読（よ）むのが好き（す）きで、家（いえ）にこもってずっと本（ほん）を読（よ）んでいました。たまたま出（で）会（あ）った本（ほん）に『この本（ほん）を読（よ）んでいるあ

なたの体（からだ）のどこかが痛（いた）かったり、悪（わる）かったりしたら、それを恨（うら）むのではなく、そうではない場所（しょ）に感謝（かんしゃ）をしてみてはどうでしょう』と書（か）かれてありました。そこで氣（き）が付き（つ）きました。『自分（じぶん）は車（くるま）が大爆発（だいばくはつ）するような大事故（だいじこ）に遭（あ）ったのに、右腕（みぎうで）が使（つか）えなくなるだけですんだ。ありがたいな』と思（おも）えたそうです。その次（つぎ）に『この本（ほん）が読（よ）めているのは左手（ひだりて）があるからだ。眼（め）が大丈夫（だいじょうぶ）だったからだ。運動靴（うんどうくつ）が履（は）けないと嘆（なげ）くのは、履（は）ける足（あし）が残（のこ）っているからだ』と、だんだん物事（ものごと）を前向（まえむ）きに感謝（かんしゃ）の目（め）で見（み）ることができるようになったのです。それから毎晩（まいばん）、残（のこ）ったところに手（て）を当て（あ）てながら祈（いの）り続（つづ）けたそうです。『左腕（ひだりうで）さん、残（のこ）ってくれてありがとう。南無妙法蓮華經（なむみょうほうれんげきやう）。心臓（しんぞう）さん、止まらなくてくれてありがとう。南無妙法蓮華經（なむみょうほうれんげきやう）。』そして右腕（みぎうで）に向（む）かって『右腕（みぎうで）無妙法蓮華經（みみょうほうれんげきやう）。』

さん、長い間私の人生を支えてくれてありがとうございます。ゆっくり休んでね。南無妙法蓮華經』と、動かない右腕をさすってそう唱えたと言います。そのうちに、動かないはずの右腕の先が動き出したのです。それから4年間リハビリに励みました。すると多少不自由があっても普通に動くようになったのです。『どういうことだろう』と思います、お医者さんのところへ行くと『ああ、腱が枝分かれしましたね。太い腱が切れてしまったけれど、切れたところが枝分かれしてつながり、動くようになったんですよ』と。

こういうことがあるんですね。人と人は助け合うとよく言いますが、体の中も助け合います。脳は、脳の一部分がダメになっても他の部分が助けて正常な働きができるようになるということを本で読んだことがあります。まさ

にそれです。

今はほぼ普通に動くようになったそうです。

そして言われました。

「実はその若い女性とは私のことです。事故を起こして心が折れそうになりましたが、そのことで『感謝』を思い出して光を見つけました。感謝によって動かないはずの右腕が動くようになりしました」。

感謝によって奇跡が起こったのです。

片腕のプロゴルファー・小山田雅人さんのお話です。小山田さんは二歳の時に事故で右腕を切断しましたが、いろいろなスポーツを普通の人以上にできました。高校卒業後に「ゴルフをやってみたい」と、左手でクラブを持って始めました。右手の義手は支えるだけです。そんな

状態でゴルフを始めたのですが、どんどん上達してハンディキャップゼロのスクラッチプレイヤーになりました。その後、結婚をして奥さんに「もう少しゴルフの腕を磨いてプロになりたい」と言ったそうです。普通ですと「また、馬鹿なことを考えて」と言われそうですが、奥さんは「頑張って」と言ったのです。

そんな折、頭が痛くなり、変だと思って病院に行くのと左側頭葉に脳腫瘍が見つかりました。

手術をして無事に腫瘍は取れたのですが、それから体重がどんどん減って20キロ痩せたと言います。ゴルフも、それまで270ヤードくらい飛んでいたのが200ヤードくらいしか飛ばなくなっていました。「これではプロゴルフアーは無理だな」と愚痴を言っていると、奥さんに「何を言っているの。訓練したらわからない

いわよ」と言われ、野球用の重いマスコットバットを左手一本で三年間振り続けたと言います。そうすると体重もどおり、飛距離も元どおりになりました。そして、めでたくプロゴルファーになることができました。

「ないものを嘆くより、あるものに感謝しましょう。私は右腕を無くし、左側頭葉の大部分を無くしました。しかし、残った左手と右の脳に感謝して今やっています。人間は誰でも、人生でいろいろなものを無くしますが、無くしたものではありません今あるものに感謝をしましょう。そうすれば必ず道は開けます。幸せになれます」と小山田さんは言っておられます。

三恩のこと

感謝を分析すると「三恩」が出てきます。

「知恩」「感恩」「報恩」です。

「知恩」とは「恩を知る」ことです。たとえば物をもらった時、誰からもらったかを知るということ、また、何かしてもらったら誰からしてもらったかを知ることです。

「感恩」とは「ありがたい」と感じることで「報恩」とは「ありがたい」と感じたら、それに報いるために何かをすることです。

この「知恩」「感恩」「報恩」の三つがそろって感謝ということになります。

最近いろいろなメディアで報道されている日本とトルコの友好のがあります。この話を元として映画が作られました。「海難1890」と言います。昨年12月5日に公開されましたから、ご存知の方もおられると思います。

1985年、イラン・イラク戦争はひどい状態でした。もともとは、フセイン大統領がイランに攻め込んだのが始まりでしたが、どんどん状態が悪化していき、ついに1985年3月、フセイン大統領が「今から40時間後からイランの上空を飛ぶすべての飛行機を打ち落とす」と言い出しました。それまでも外国人は自分の国に避難をしていましたが、日本人はなかなか避難できませんでした。なぜなら、日本の飛行機は戦争が始まった時に航行を止めてしまっていたのです。どこの国も、自国民以外はなかなか飛行機に乗せませんでした。ですから日本人は、よその国の航空会社のほとんど無い空席を探して帰るしかありませんでした。

結局、216人の日本人がテヘランのメヘラバード国際空港に足止め状態になりました。こ

んな時だから、政府専用機や自衛隊の飛行機を飛ばしたらいじゃないか、と思いますが、それができなかったのです。今は法律が変わって、政府専用機も自衛隊機も飛んで行けるのですが、当時はだめでした。そこで外務省が日本の航空公司に頼んだのですが「イラン・イラク両国が飛行機の安全を保障しない限り飛ばせない」との主張を曲げません。残された日本人は絶望の中にいました。そこへ突然、トルコの飛行機が飛んできました。そしてその飛行機の機長が「日本の方々は全員乗ってください」と言いしました。「どういうことだろう」と思いながら日本人はその飛行機に乗りました。しかし、21人全員は乗れませんでした。すると、また別の飛行機が飛んできて残った日本人を全員乗せ、トルコのイスタンブール国際空港に送り届けて

くれました。救出された人たちは「一体、なぜトルコの飛行機が助けてくれたのだろう」と狐につままれたような思いでした。取材していた日本の報道機関も理由が解りませんでした。それをトルコ人が教えてくれたのです。

その年からちょうど百年程前、トルコがオスマントルコという大帝國だった頃、エルトゥール号という大きな軍艦が日本の明治天皇を表敬訪問した帰り、台風に遭って沈没してしまいました。トルコの人々は台風というものを知らなかったのです。日本人が「この時期は台風がよくあつて危ないから出航はやめた方がいい」と忠告したのですが、それを押して出て行き、結局沈没してしまつたのです。場所は今の和歌山県串本町沖で、結論を言いますと、乗組員609人の内、69人が助かりました。助けたのは、

当時の大島村檳野の村人たちでした。村人たちが命がけで荒れる海に飛び込んで助けたのです。体温が下がって命の危険にさらされていた人々を、村人全員が裸になって暖めたと言います。

それから、自分たちの食糧を非常用の物まですべて与え、着る物まで与えました。貧乏な村で余裕など全くありません。ですから「この先どうしよう。着る物も食べる物もない」と話し合っている、誰かが「いや、おてんとうさまがどうかしてくれるから大丈夫だ」と言ったそうです。

その知らせを聞いた明治天皇が全国から優秀なお医者さんを集め、神戸の病院に送りました。怪我をしたトルコの船員は全員神戸に送られました。この話が広まると日本中からかなりの金額の義援金が集まりました。

何か月かして、元氣になった船員たちは明治天皇の計らいで、当時の日本の最新鋭の軍艦でイスタンブールに帰ることができました。

こういうことがあったのです。日本人はそのことを全然知りませんでした。

なぜこの出来事をトルコの人は知っていたのでしょうか。ネジアティ・ウトカンという駐日トルコ大使だった人が「エルトゥールル号が遭難した時に日本人の人々がしてくれた献身的な救助活動を、今もトルコ人は忘れていません。だから、トルコの飛行機が飛んだのです。私も小学生の頃に歴史の教科書で学びました。今の日本の方々は忘れてしまったかもしれませんが、トルコでは、小さな子どもたちでさえエルトゥールル号の出来事を知っています」と語っています。

私があるテレビ番組で見た時には、二番機を操縦していた操縦士が「あの時はフセイン大統領が言った時間ギリギリだった」と、インタビューに答えていました。もしかしたら打ち落とされるかもしれないという時でした。しかしその操縦士は「怖くなかったですか」と聞かれると「撃ち落とされるかも知れないから怖かったけど、日本人のためなら何度でも飛びますよ」と言っていました。

もう一つ後日談があります。イランとトルコは近い国ですから、イランにはトルコ人もたくさんいました。でも「日本人を最優先せよ」と

いうオザル首相の命令で500人のトルコ人が飛行機に乗れませんでした。その人たちはどうしたかという、車がある人は車で、無い人は歩いて国境を越えたと言います。車でも3日以上かかるそうです。オザル首相の命令でそうだったのですが、一人も文句を言う人はいなかったそうです。

この後、トルコで大地震が起こった時、日本の救助隊が世界で一番最初に救助に向かいました。

本当に感謝は、人類繁栄の法則であると感じずにはいられません。